日本書紀第十五

顕宗天皇
仁賢天皇

十四

逸

太政官文庫

和書門 類
特別 三二〇九九 號
第五十五番 函
三 架
二 冊

内閣文庫			
番號	和	32099	
冊數	32 (17)		
函號	特	55	12

共廿二

国立公文書館
National Archives of Japan

秘閣図書之章

白髪武廣國押稚日本根子天皇　清寧天皇
弘計天皇　顕宗天皇
億計天皇　仁賢天皇

紅葉山本

日本書紀巻第十五

白髪武廣國押稚日本根子天皇

たけひろくにをしわかやまとねこの天皇は大泊瀬幼武の天皇の三らうしらぬあたり給みこなり母をば葛城韓媛と申す天皇生れましゝよりしらがしろくしろく志給しかとなりておほんぬくとめくミ給ふ大はく瀬の天皇みつ地の中みことぬくしむよおやしきまで雨あり二十二年立て皇太子となり給ふ二十三年八月大

はつせの天皇かんさりましゝに吉備のわかひめひそか
に幼子星川のみこにかたりていはくあまつひつきしろしめさんとおもはゝ
まつおほくらのつかさをとれ長子
磐城皇子母夫人のその幼子にをしゆることをきゝて
いはく皇太子是我弟なりといへともいかてかあさ
むくへきやとのたまふつゐに星川のみこは
はゝの母の夫人のこゝろのまにまにくは
井に大くらのつかさをとりて外門をさしか
ためてこゝにわさはひにそなへいきほひをほしい
まゝにおほやけものをつひやしぬこゝに大伴室屋大連
やまとのあやのつかのあたひにかたりていはくおほはつせの
天皇のみことのり今まさにいたりなん
ゆいせうのみことのりにしたかひて皇太
子につかふまつるへしとていくさをおこして
大蔵をかこみ外よりとちかためて火をはなつ
ここにやきころさるこの時に吉備のわか媛いろねの
みこのこと父の兄君城丘前来目〈名闕〉りとも川
のみこのみなくやきころさるゝなかに

の三野のあがたぬし小根おぢおのゝきて火を
さりてにげいでゝ草香部吉士あやひこがあし
をいだきてよりて大伴室屋大連にのらう
さらにいはく奴あがたぬし小根がほしかはのみこ
にはべりつかへしことはまことなりさりとて皇
太子にそむきまつることなし
こふねがはくはおほめぐみをくだしたまひてたのいのち
をすくひたまへと漢彦ことゞもつぶさにあかし
大伴大連にまうしければつみのたぐひに小根を入
れず小根よりて漢彦をして大連にまうさしめ
て云大伴大連わが君おほきなるあはれみをくだして
しにせまりしいのちをとでつぎのべたまひて日
の色をみることをえたりとて難波の来目
のむらの大井戸田十町をもて大連におくる
また田地をもてあやひこにあたへてその
恩をむくふこの月吉備の上道のおみら朝に
みだれおこるときゝてかのはらにうめる星
川のみこをすくはんとてふないくさ四十

艘をひきゐて海にうかふるもすでにして
やきころされぬと聞て海よりかへりぬ天皇すなはち
使をつかはして上道の臣等を
せめてそのしれる所の山部をうばひ給ふ冬十
月つちのとみのついたちみづのえさるの日大伴室
屋大連臣連等をひきゐて璽をひつきのみ
こにたてまつる
元年春正月つちのえいぬの朔みづのえねの
日ありつかさにみことのりして壇場を磐余の
甕栗にまうけてあまつひつぎしろしめす
つゐに宮を定むかづらきの韓媛をたふとみ
まして皇太夫人とし大伴室屋大連をもて
大連とし平群真鳥大臣をもて大臣とすいづれも
さきのごとし臣連伴造
等おのおのつかさくらゐのまゝにつかうまつる
冬十月みづのとみの朔かのとうしの日大
泊瀬の天皇を丹比高鷲原陵に
かくしまつる時に隼人ひるよるみさゝぎのかたはら側

なかりみうるぬものあたへ給へとあへてくらはさ
りき七日ありて死にきつかさ墓をみさゝ
きのかみにつくりて禮をもてこれをはうふる
ことし太歳かのえさる

二年春二月天皇みこなきことをうれへみ給て
をして大伴の室屋大連をくに〳〵に
つかはして白髪部の舎人しらかみ部のかしはてし
らかへのゆけひをおきてねかはくはのこりの
あとをたれてのちのよにみせしめんとの
給ふ。冬十一月おほなゐのあへまつりの
おほせによりてはりまの国のみこともち山部
のむらしのとほつおや伊よの来目部の小楯を
あかしのこほりにまかりしにしゝみのみやけの
おひとおしぬみ部のみやつこ細目か
にひむろにていちのへのおしはのみこの子億計弘
計のみことをみたてまつりてうやまひあかめ
かねてはいたはしくおもひてつかへまつらんとし
ましらのものをそなへたてまつりのちにもてなしたてまつる

もとより他業(しわざ)のうへをとゞめてかくしまゐらせ(安置)侍き
給ふをくはしくはかりて(驛)いそぎみやこにのぼせてみかど(奏)
にまうしければ天皇おどろき(愕)給ひなげき給ひて
やゝ久しくいたみ(悽懐)おぼしてあなうれしきかな(懿)よろこ
ぶべきかなよろこぶべきかな天おほひなるめぐみを(博)たれ(垂)
まして二人の児(こ)をたまへりとて
乃小楯(をだて)をして節をもたしめ左右(とね)
のとねりをひきゐ(将)て明石にむかへたてまつら
しめ給ふ委しくは弘計(をけ)天皇の紀(こゝろさき)にあり

三年春正月の元日の朔日(ついたち)小楯(をだて)億(お)
計弘計(けをけ)の兄弟をいざなひまつりて摂津の国に
いたりぬ臣連(おみむらじ)に節をもたせて王(こきし)
のみくるまにて宮中(おほうち)へいれまゐらせける
夏四月乙酉の朔(つい)たち辛卯の日億(お)
計王(けのみこ)を皇太子とし弘計(をけ)のみこを
皇子(みこ)とし給ふ　秋七月飯豊(いひとよ)の皇女(ひめみこ)角(つの)
刺(さし)の宮にて与夫初交(をとこにあひ)したまふ人にかたりて
いさゝか女の道をしりぬ

伊治なんでむとたちへきつ井に渡りひと
祢がたらしとめさまふ。此丈おとしいふいまさはやびるあはに
九月こりのえ祢の朔こりのとみうしの日にむ
殊じ越ましいし西風俗とめぐりん帰しむ
冬十月こりのえとらの朔さのとのとり乃日
えんしめりありて渡らく大馬りとくおそびすの
なむてまつりそし。不得缺上十一月かのとのいの朔つ
ちのえちまり乃日にたる身しとし大廷にまのお
かりし語とさこさぬと身すりにみかそこに渡
り物こめこ川りちかくのりたりとりて渡らり
おほ。この月にこのかりの多にくおくひみ
使とまうしし二めこ川きさめく来川れ
四年春正月かのえいぬの朔こ乃のえ身川乃日
まこの語り乃多にくのにくひみ語壹みまよ
のおりし語物とぬまふとれのくあれ
あり。夏閏五月おほさみさけのことろこと
五日。秋八月こ乃のとのひはしの朔こ乃のとれし
乃日に天皇こりかくる人こと紙とひたまふ。

この日蝦夷(えみし)はやんとならびにうちつきしたがふ
九月ひのえねの朔日天皇射殿(ゆどの)にいでまして
はくれうとうみのほかのくにぐにの
つかひにいさせ給ひて物たまふことおのおの
しなあり
五年春正月このえいぬの朔つちのとうしの
日天皇文殿(ふづや)に崩(かんさり)ましぬ時にみとしそこばく冬
十一月かのえむまの朔はちのえとらの日かう
ちの坂門原(さかとはら)の陵(みさゝぎ)にをさめまつる

弘計天皇　顕宗天皇

弘計天皇は大兄いざほわけの天皇の孫、市辺押磐皇子の子なり。母は荑媛と申しき。

譜第に云、いちのへのおしはの皇子、蟻臣のむすめ荑媛とあひ娶して終に三たりの男二たりの女を生ます。その一を居夏ひめと申しき。その二を億計王と申しき。この名をも嶋稚子と申しき。この名をも大石尊。その三を弘計王と申し

たのなは来目稚子と申しき。その兄を飯豊女
王、またの名は忍海部女王と申しき。其乃
又を橘王と申しき。
一本に飯豊女王をもて億計王の上につい
でたり。蟻臣はあしだとく孫の子なり。
天皇はさしおきはじめたりし済してしを
におほんめりしのちまへんめりさむしと志給
しめ給ひて孫に申をうじつきまかとしむる
まうしてた宮神をみそになげめるがごとくりた
はとうはやくしこ給ふをめぐみ給ひしこと
まつりごとにつきてしかも給ふにしたがひしめぐみ
やもめをあはれみて天下むつひけて穴穂天
皇三年十月天皇の父のみこ市辺押磐
皇子ともろともに佐伯部の仲子蚊屋野
にておほくの大泊瀬の天皇のためにころされ給
ひぬ。かくて同穴にうづまれぬ。こゝに天皇と億
計王と父のみこ射ころされ給ふと聞かせ給ひし
かば、たゝせ給はずしてまぎれてしのび給ふとて

かくてまたしと称り日下部のむらし使主（使主は日下部の
連の名なり）と其子吾田彦（使主の子也）とおそうりて天
皇と億計王とをまもらせたまひしの余社
こほりにうつり使主は其み名字をかへ
あらためて田疾来となん称しまゐらせしが
なをおそれてしらちの海の縮見山のいは
やのうちに入てことばかりしかれき死し天皇あを
使主乃おくれをおゆしめされ兄億計王と
もろともにあはの國ありしかとおりよりいでて

してもとの字をあらためて丹波の小子とは
しゞみの屋家の首にはしりつかへ（しゞみの屋家の首は
とうとう部の造かそゝめなり）吾田彦もしたがひてともにつかへ
まれしたぞ海くしてあまつ津まれ白髪天
皇二年冬十一月播磨の國のみことをりとして山
部のむらじ小楯伊予の来目部の小楯
あかしのこほりにいたりて新嘗の供物を
あまたものそなへ（一云郡縣よめぐりありきて）田ちしとおさし
ゐましくしてえらやきのわらしとよみひね新

室(しつ)あそびして夜ふけてのちにかくのたまふてみて
ち天皇兄(いろね)億計(おけの)王(みこ)にかうなかれあそはせ給ふにさわぎ(乱)は
むとさりてこのよしにおほまへの心とかさね
ぬれとおほつかなくおもひこしあはさんと
ともかくにかくさはりしれたる億計王ん
たえかねてひてれくしまりくちくらいあげて
こ弟をまもんと身をゆるさしてゐみすと御
ぬりまんといふばもかしのすまて天皇のたゞ
しく吾もこゑ去来穂別(いざほわけの)天皇の孫(みまご)なりと志つ

と国(くに)中人みたへなうしるとふなみな
ひなかりしてかおもはんになんやたん井に
億計(おけ)の王(みこ)とゝもに相抱(あひいだき)えなくえおさへ給ふに億
計王のゆかしきなくなきうちに自禁(みづから)も弟(いろと)によるに
よそに母かうしたいりなあげてもそのか
きにつき天皇いかにいくれて激揚(げきやう)けるに僕(やつこ)なを
あにおへく伊さいむとの人もおもかんや億計(おけ)王
のわぬくぬくらく弟(いろと)いかしらくさきの徳業(とくげふ)に
ちへみらくらく莫才(ばくさい)かへ賢徳(けんとく)かくおつきゆつ給

御はしもつかさ三なかさめしてさもうして天
皇はしろしめへおもむきまいてしもとみ
室のかみつきて下風にほしまゐらせけ
のおうしおほやけにかまのかたはらにゐる
とへて室ことほきをしける夜ふけ酒たけなはに
あそびはてぬ。くまひおはりてこやもの首小
楯みかけて云、僕このむしびをともしのとんはよ
人をうやまひおのれをいやしうして人をさ
きにしこはたおのれをおちにせりつとしていや
てしもおもとしてさりゆきひきたつてそ礼
はあるへしにそ君子というべし。とて小
楯しうさてひとしをる者にお掛せてあ
にとてまへと絃ゐてに兄弟おひいつつ礼ふ
ことへしうおそくたち弟に小楯せめて云
なんぢよれそさうさいおそさきてこやくにある
なまへと云て億計まへいりてまひたまふ
ことをてはおりぬ。天皇つきまへりてこつ
の衣帯をとりてさけてひらいて室寿してのた

宮とも・津のゆはつもしい稚室つなね つくは
れたてし柱は・此家長乃御心のしづまりなり
とりあぐるむね梁は・此家長のみ
心のはやしなり・とりおける椽橑は・此家
長乃御心のひとしきなりとりおける蘆
萑は・此家長の御心のたひらかなるなり・ゆへ
るなはかづらは・此家長の御いのちの
かたきなり・とりふける草葉は・此家長乃
御富のあまりなり・出雲はにひはり
なり・にひはりの十にぎりの志ね乃か浅甕に
かめる・おほみきうまらにのみをやくらふるかね・
吾こゝちあしひきの此傍
山さをしかのつのさゝげて吾まひすればうまさけ
餌香の市にあたひもてかはぬてのひらも
やらゝにうち上たまひつ・吾とこよたち
ともいへるはくらくの祢にあそ
て云・
何ししか詠かと云やうなるを川ゆるい

なをさかしくして他その孫々うしなひ給ひて
小楯といふて云ものありし孫がうらくしてまうく、
清寧天皇は丹波にありしまうさせし給ふ
にげくしまひいれしくなるあまひにわらひて
くちいれらからのしてまうし
恥しくやましくそののちうらわさちがえておはせ
さひ屋隠うるる是なり小楯といふしみてかゆ
くおやしみくまくら城いりし、天皇
東けるてわたしゆるく伴そのうた一家新
ともがりしそうとえとしてし、市辺(いちのべ)のぬし
父は天下をしろしめす天子たりつ押磐(おしは)
のみこの御裔(こうえい)なり、隠れし是なり小楯おどろき
におどろきさて井とりて伴ひかん
にかうがいまいり親にまいりめでたてまつる
まつりやうしとさみつかにはしみつかまつる
にらてしくまみ郡(こほり)のおほんぬしはらひて
文を例なり日とあらじしてかりにたりし
りとぬくまつりしかも他にやこれ過ぎて
妹ゆりの主(みこ)とむしんしとりとむ、白髪(しらかの)天皇

れはしめしまさむあけひとをみつから朕子(あこ)

なしとて嗣(ひつき)とせんとおもひまして大伴大連(むらし)

をつかはしてやのくにゝつかはしめ給ひ

白かみのみこのみなをとゝめ来目部(くめく)の小と

楯とし膳部(かしはて)となりさしめ左右(りこ)の舎人(とねり)と

なしておかしめたまひてしん人をくまれける

白髪(しら)天皇三年春正月天皇億計(おけのみこ)王にまて

川くはの国にゝかりて大連(おむらし)をして迎へて

とりよせしめ王の御蓋車(みくるま)とりくらゐの中ま

じん入夏四月億計(おけのみこ)王をもつて皇太子(ひつきのみこ)とし

天皇をもて皇子(みこ)とし給ふ五年春正月

白髪(しら)天皇かんさり給ふこの月皇太子億計

王と天皇とくらゐをゆつり給ふこと久し

うちつゝきさりにおいて天皇のあね

姉飯豊青皇女(いひとよあをのひめ)おしぬみのつのさしのみやにて

まつりことしをこなひ給ふとこそ

のいひとよあを代のみかとになりたまふとよみ

うちはくらゐにまことて云

座ましゝをみえ給ふをのこおしみのみこ
このみこれおほはゝのきさきなり
冬十一月飯豊青尊うせさせ給ひてかつらきの
埴日乃をかのみさゝきにおさめまつりぬ十二月
百官おほきみたちはへり皇太子億計天皇の
しるしを持て天皇のみましにをきて再
拝してもろおみたちのくらゐにつきてのたまはく
あらく此天皇のくらゐは功ある人まさに
あらはしてあきらかにしめしたまふといへとも
むくらも給へしとみな才のくらゐとなりと
いはれまひしかは天下をとりて天皇に授けはらたま
ひ天皇のくらゐを授りて才をもとめえ位に
つき給ひしとのたまふ又白髪天皇また兄
とふかくとおほしめしつきのみこにゆつ
らせ給ひ前後よくいなひてのたまはく日
月おほいなりといへともやまさりその光りまさ
らむかし時雨ふりといへともなほそゝきまさる
あらすや雄たれ天人の才として兄たりつ

よつり西よござらむとのりまんしく然して憤(いきどほひ)
然てらしみて遠ざとられて処(とう)しなくさな刹
ともがら他とうちしおもらじ弟(いろと)いやまふのちと
いりみおもし弘計の処しと志のひさと見うつ
ゑしみん弟伴やまふしほよのみかりし始(ふる)さ
おとさぬみ然ぐらいぞらんぞう刈りう配し甲
皇太子(ひつぎのみこ)とし給んじゐまてん億計(おけ)の
みこの立給ひて白髪(しらかの)天皇ハ吾兄(いろせ)のせんとと
西天下の事とおげて先我よさげを給へ

甲我そ遠かてしをなしおもとんき陛み大王(きみ)ハ
西然利(みじ)のかな遠然さくものすげ帝(みかど)
孫(みまご)おうい遠にかうちられも遠とみうもの
いかしぬらまへくて播紳(おほみひとゝ)よ給こひ天(あめ)を
伴うくゑの給らむとみおもふおもれうしくて
黔首(おほんたから)よ給ふ地(つち)と梅じ年(めぐみ)よすて然うこと
もりてよく四維(よも)とかつこめて永く給つのよ
とさうこめ給いさ然しとの津りて物ほみちりせ
西きられみち世めくまう起自むおう逃しる

かれおのがみかどにみえたまはむかとおもひて、この日
兄といふともあに先にをらんや。いさをしなくして
よりゐなばとがくいかならずいたる
なん吾きくらく、天皇ひさしくむなしうすべからず。
天命(あめのみことのり)はゆづりさくべからず。
大王(きみ)は社稷(しやしよく)をはかりごとゝし、おほんたからを
心としたまへと、ことばをおこしていきどほ
りむせびて、なみだながるゝにいたる。天皇もつはら位を
つゐにをらざる事をしりて、兄(いろね)のこゝろにたがはず。

ゆるしうけしたまふ。しかれども御坐(みまし)につき
給はず。よのひとその志まことをもてゆづる
ことをよみしてまうさく、うべなるかな。
兄弟よろこびやはらぎて、天下いきほひに
おもむく。うからやからにあつければ、おほん
たからうつくしみのこゝろをお
こすといへり。
元年春正月つちのとのみのひ朔、大臣大連(おほいまうちぎみおほむらじ)
まうしてまうさく、ひつぎのみこ億計(おけ)の

おほぢみのいさを（徳）ハあきらかにさかん（茂）にして
天下をまつり給ふ陛下まさしき（正）はい（統）でゝ
御しまれ御さにおきてハつき（鳴）と（緒）うきてあめ（郎）
れるぬのあらはしてみおやのさいはひまつる（廟）
れ伴きかひ（列）ちらまつき給ふ上ハまさに
天の心にむかひ（當）下ハおほんぬゝのみこゝろ（民）をと
ぬきさぎ（厭）たまふべしとあるとあるほど一日つ
きとも給しめされし井みこゞゑもろの孫（践祚）
つとあわりの國（蕃）のまちきつ（群僚）として給ふもち

れたのそこ給らしみたれとゝおもし
めん天命（あめのよさし）をつきのみこぬさ川をまつとゝし
まつり給ふをじみの伴きかひいよしくさ（聖徳）
かんぬしてさいはをしやまひあきらかなら（福祚）
ゆく宗あくしてをながくふりいやまひは（謙徳）
ゑしみさつらふと給はとあまれもえ兄乃（恭・慈）
えこのみことちゝとう世てあまり日ほさき（順・大業）
給らけつき給へと協めまつれうしとちゝ（制・可）
まつえぬもとかも他御ちきみちきちとちくめて（公卿百僚）

あるとき乃屋はりのこやにおはしつゝはたさし給ひし
やほりのはりさらんなるへしとみかとゝ給ひこ
なり

武烈云、弘計天皇の文二所あり、一文に
少郊に二乃文を池野に
文武本に云、甕栗にこや津く里給
この月皇后難波乃小野王を立給ふ天下つ
おほし給ふ
なふその小野王とおほはまるこそ孫
乃天皇の曽孫磐城王の孫丘稚子王の女
なり

二月はちのえいぬ乃朔ついたちのえうま乃日みこ
とのりしたまはく、先王わざはひにあ
ひ給ひておほのにおほしたまへり、朕いけな
はれしにいりてあげてうばゝかれ
まげてもとめむ人よあつてはまつりはかり
につきておほれ骨をとりもとめよと
おほしまし給ひとみちおほして

皇太子億計のみことは伊ざちなきいさむしてさけび
うらえ給へるにこの月ねかれたまはれしと
然してはよく天皇これをあはれみ給ひ
むかしのたんねんごろにてたまへてまつり
さく置目は御骨の所をしめ知ろしとまうしこ
うりくみをぬきまつりしと給ひしを
置目しく老嫗のなまへあつての國技に城山
の君のおや屋しきをたまひつつ祿のいたく
名を置目といふ

さてみ天皇とひつぎのみこ億計とおのれの
國よりのぼしまして来田の綿蚊屋野中とかに
里あひくるにまうでふみちうしこゆおんなの
のこし完のぼんでけちを給ひしと称んし
給ふまうい御しろしよき伊ゆしてけりこのこ
くほかしたまし仲子のかりし骨を御しへ
よらむうりこゆらくましもの哀しく
さかのみこのめのしえんざゆゆしてまう
はく仲子も上の歯おちありさらまどとて

よう殺しまゐらせしめのとが侍りをとりもちて
みしらの骨とおいもりしくどもつね
みもし髑髏は見分かつとも他かうし覚みえ
たゞ四支かや諸骨の中からの別つのえさりきを
にらぬてあつひみをとく一つの双陵のうえ
かま美とぬし老嫗(おうな)置目(おきめ)ありしみしとのう
して文のしらくのちうき処みもんづる
給くあいめ先ぐえ給ひてゐめつゐぬもいで
あうしむこの月みとれりしてゆきます

に老嫗(おうな)さむしくあり古をとうやくなり
とおり伶俜をみえじ羸弱はまとうて不便引きして
それみかくり行歩きゐまいり出侍るいづくしあと絙れ
しも鐸(ぬりで)をうけ称ざ労らしひあくものまう謁さんは
と入ていふをみも他さるを給ひし朕汝がきたる
とちらじうみ老嫗えしとめりとうけたまはり
ちり鐸(ぬりで)をなしてきいほ天皇をかみ
鐸のうちをひこしめしゝ寄ることゆき
倫らく

あさからすとおもほしめしけれはなかならす
ぬしくおほしめしよたはされくしと
三月上巳の日後苑に幸してめくり水
のとよのあかりきこしめしき。夏四月の
ひのえとらの朔ひのとのうの日みことのり
したまはく、おほよそ人主のおほみたからを
すゝむるゆへんはたゝつかさをさつくるなり。
国のおこるゆへんはたゝいさをしをほむるなり。
かのさきのはりまの国のみこともち来目部

小楯いもとめむかへて朕をあけたり。
そのいさをしおほいなり。ねかはしくおもふところか
あらはしれをまうせ。小楯ゐやまひてまうさく、
山のつかさはもとよりねかふ所なりしかはと
といふ。すなはち山のつかさに拝して姓をたまふ。
山部連氏とあらためたまひ、吉備臣をそへとし
そいはつかさとし山守部をとりて民とす。善を
ほめさかりしとあらはし、めくみをむくいてあ
つきにこたへ、めくみうつくしみことにたえ、富はよく

儔(たぐひ)なし。五月にはさゝ山の君からふくろのすく
祢、事皇子(みこ)押磐(おしは)をころしまつりけることにより
まさにころさるゝにのぞんで、手をすりてなく
こゑ、まうすことしたゝめてかなし(哀)。天皇こ
れをゆるし給ふ。みはかもりとし、みさゝぎの戸(へ)によせ
かねて山をまもらせ、籍帳(へのふだ)をけづりてものゝべ
山部(やまべ)のむらじにつけたまふ。たゞし倭帒(やまとふくろ)は
その妹(いろと)置目(おきめ)がいさをし(勲)によりても
とのかばね(姓)を狭々(さゝ)城(き)山の君の氏(うぢ)とたまふ。六月
避暑殿(ひむろの)にみゆきましてうたまひせしめた
まへつぎみ(群臣)たちとはべらしめ、酒食(奏楽)をまうけ(設)てこれをあ
しらふ。ことしたいさいきのとのうし。
二年春三月上巳(うへのみ)の日、後苑(みその)にゆきましまして
めぐり(曲)水のとよのあかりきこしめす。この時
まへつぎみ(公卿大夫)たち、臣(とみ)連(むらじ)国造(くにのみやつこ)伴造(とものみやつこ)と
ほどへたまふ。ことのありなりて、まちたれうち
たまふ。みなよろこびまうしき(称万歳)。秋八月つちのと
のひつじのはじめの朔日、天皇このかみのみこ億計(おけ)に

しかてわれらに論らく吾父先生法にいはしまし
さらしこの大きみとの天皇みこ論されしうずると
わらみとこと今はかへりて併まつえとしいさと
とりおげさ懐こころみみこそり懐しつておき
おもしくおもひてあるのこらじとおなかんと
とおりに吾さく父のけしいともよ天といくじか
もて兄弟のあしい兵とそむけともられのあ
なくもとおわしらぜとかのいやしきひとの
たみも父母乃あるみなほしし昔み孫来てと

海くつめして生とともみなん市朝よおへとと
兵とそむきはしこそもみら他なかついへんや
吾なりて天子とたらて今み二と坊孫がし
そいかのみやしきをこかちかちらのとそらむて
たなおちうさん今このむらひとよてせいまうしお
やみたてこがふみあつさつめんや皇太子億計の
みこたげならてえもて為らたとれちら併さ
えて和く海らくよりし太きみ世の天皇と
よろ川のまつりしとらめじし嫡さるて天下とれ

ぞんてうし給ふ菟裘よろしきおつさし天皇の
身なれば吾父の先王は是天皇の子なりと
いへども尤やまし給ぬおつくる天位ぬのぼり給
ふたにちまさとてられしとみまいらぬれいやしき
ちまさとあるこゝろざしのんでみさしまとこが
たじんぬまさとろ人主としてりく天の霊につ
かゆ法らん故されころべうざは一おれまる
天皇と億計といんけさ故白髪天皇にあひ
ぬくまし川里おもけ寵ゑえとぬめぐ

とかうぬうじんはおのぬ寶位ぬのぼるそまんや大く
陽乃天皇も白髪天皇の父なれば億計ら
たりくさうし記とぬれらる老賢の云とよして
むくいさうるをうし徳としてこゝへさうはなし
あくごとおる故こゝ人けうは記し俳やおうのかく
きものなれば陛下虫と志銘しめしていきおい
わざおらく天下よまうちん志りるとみさしまり
故にかちてく人つとく菟裘ぬみん楊しめは億計
たそうるはその國よのぞんてもてたほんたう

と申しゝかは、そのことつねよりもさら二れ
里天皇めくゝ御くらうしきかなしみたまふ
課役をやめしめたまふ　九月置日おひに候し
みくくりあんと申しして、まうさく、いきちう
おとろへおとさきおつむかぎらはをつまたらから
縄みかくましとともえらくとあるまた孫がごとく
くりとつなみくるまうりてりとくそのおほし
里とらん天皇おほしめしいこゝにたまうて物千
限とたまいあくうしめまうせんみちとらみか

さ回あひりしなしと城おほげ貢給てとれく
ち奇とたりむてめく満らく
おきめとよおつとのおさらめおそらりく
こやりかくれくみくもそうとおらん
冬十月は甲のえ甲の朔の川のとれいの日
まは地ならこちみとよのおりりし給こさの時
天下やらとくめいうらめりこあおほんたりくさし
汪っうおくとなしおしちさうりみおりもむ
ありておほんめのくさいんみちあ里稲穀ときさと頒

乃銭一文にかへ馬野にみちみちたり
三年春二月ひのとのみの朔日阿閉臣事代(あへのおみことしろ)
おほせことをうけて任那(みまな)にまかる次て
に月の神人にかゝりてかたりてのたまはく
を我みおやたか皇産霊(みむすひ)のみこと天地(あめつち)を
あひいらかしつくりしいさをましませはよろしく民地(くにところ)を
もて我月神にたてまつれもし請(こう)まゝに
我にたてまつらは福(さいはひ)あらむとのたまふ
ゆへに事代(ことしろ)京(みやこ)にかへりてつぶさに
さみかどに奏し歌荒樔田(うたあらすた)
歌荒樔田は山しろの国かとのゝ
こほりにあり
とこしへにたてまつり壱岐(ゆき)のあかたぬし
のとほつおや押見宿禰(おしみのすくね)をもてまつらしむ
三月上乃巳(み)の日後苑(みその)に行まして曲水
のとよのあかりきこしめす　夏四月きのえ
たつの朔かのえさるの日日の神人にかゝりて
阿閉臣事代(あへのおみことしろ)にかたりてのたまはく磐余(いはれ)の
田をもて我祖(みおや)たかみむすひのみことにたてまつれ
事代すなはち奏す神のこふまゝに

みつぎにそなへまつらしめて田十四町をさゝげてまつる。かの
つしまの下縣直(しもつあがたのあたひ)とともにまつらしむ。かの
えさるの日福草部(さいくさべ)をたつ。かのえたつの日
天皇やつりのみやにかむあがりさり給（崩）
ことし紀生磐宿禰(きのおいはのすくね)任那(みまな)にまたがりよりて（跨拠）
高麗(こま)に通しかよひ西のかたにきみとなりて三の韓（韓）
をきみとして宮府をとゝのへみづか
ら神聖となのり任那の左魯那奇(さろなき)
他甲背(たかふせ)がはかりことをもちゐて百済の適莫(ちやくまく)
爾解(にけ)を爾林(にりん)にころし帯山城(しとろのさし)をつ（爾林は高麗の地や）
きづきて東道(やまとみち)をふせぎまもり糧(かて)をはこぶ津を
たちていくさを飢(うゑ)くるしましむ。こゝに百済(くたら)
の王おほきにいかりて領軍古爾解(いくさのきみこにげ)内頭(ないとう)
莫古解(まくこけ)などをつかはしていくさひきゐて帯(しとろ)（流）
山(さん)におもむきてせめしむ（攻）。こゝに生磐宿禰(おいはのすくね)いくさを
すゝめてむかへうつ。きもいさましくさかん
にしてむかふところみなやぶる。一をもて百にあ
てぬ。しばらくしてへいつきちからはてゝ事

なりましを新羅任那よりくる兇にて
百濟由佐魯那奇他甲背ホ三百餘人と
ころせり

億計天皇（おけのすめらみこと）　仁賢天皇（にんけんてんわう）

億計乃みことゝきこえしは諱は大脚（おほし）またの名は大為（おほす）
ちまうすほゝのりなくの天皇に諱字（いみなのあざ）
と備うされたるを此天皇におはしまして伊（いて）
与にくるしりたまひしかは梅の花
みこのこと
字（あざ）は嶋郎（しまのいらつこ）弘計（をけ）のもゝえにてはしませし同母（いろせ）にて
らの兄（いろせ）なりけりいとけなくましゝより聡（さとく）幼
ざれしとくしきみ多くさとりましてうつくし才（さい）識仁

又めくみあまねくらうたくさらにみやこをはなれ
給ひけんましまさはあるかの天皇うせさせ
たまひしとさんこをさけかくれて丹波国よさのこほり
にましまさを避給ふ白髪天皇元年冬十一月
播磨の国のみこともち山部連小楯はやこの
まうでゝしゝへとゝもし白髪天皇にしたし
小楯をして宴をとりつくりて左右のものども
とかくおもしろくかなでゝしばしたてまつる
二年の夏四月にはかに億計のみこをたてゝ

為て皇太子とし　事弘計天皇の紀にみつぶさなり　五年春正月
かの天皇みこし崩ましまし天下をもて弘計
天皇ゆづり給ふ皇太子となり給ふて
右のとし　事弘計天皇の紀よはしつさあり　三年夏四月
弘計天皇かんさりましに
元年春正月かのとのみの朔きのとのとりの
の日皇太子位をのうへ広高のみやにて
まつりことをしろしめしに
或本に云億計天皇の宮二所あり一乃

又ん川村み二乃又古縮見高野ありあ
むその殿乃らし新今み伴さ敷まくいまき
ゑらひど

二月かのとのいの朔みつのえねの日きさきの妃
春日の大娘のひめみこをたてゝ皇后とし給
春日の大娘乃ひめみこは大はつせの天皇
和珥臣深目がむすめ童女君とよひて生
まいらせたまう
律ゐみ一人ひとりの男みこ六ちらのひめみこ

とあまたのみこをうみ給ふちご一を高はしの大娘のひめみ
こと申しまうし二を朝嬬のひめみことまう
しき三を手白香のひめみことまうしき四を
樟氷のひめみことまうしき五を橘皇女と
まうしき六を小はつせ稚鷦鷯天皇とまう
しき天下をしらしめしつと小泊瀬の
列城にみやこ作りしめして七を真稚のひめ
みことまうしき

一年に春日のひめみこ都にて才三に列

妹手白香(たしらか)の皇女なんこと誠りく其甲よつしぬ
異(け)とを
次に和珥臣(わにのおん)日爪(ひつめ)がむすめ糠君娘(あらきみのいらつめ)皇女ひとり
のひめみことを生まし給ふ是と春日山田(かすがのやまだ)のひめ
みこと申して
一本に云和珥臣(わにのおん)日觸(ひふれ)がむすめ大糠娘(おほあらのいらつめ)
皇女ひとりの皇女みことをうませ給ふこれ
は山田大娘(やまだのいらつめ)のひめみことゝまうす又の名
赤見(あかみ)の皇女文やゝ異なりといへどもその

實(まこと)一なり
冬十月ひのとのひつじの朔つちのとのとり
の日弘計(おけの)天皇をかたをかのいはつきのをかの陵(みさゝぎ)
に葬(をさめ)まゐらせ給ふ大歳はつちのえたつなり
二年秋九月難波(なにはの)小野(をのの)皇后(きさき)さきにゐやなう
ありしことをおそりてみづから死ましまし
弘計(をけの)天皇の時皇太子(ひつぎのみこ)億計(おけ)のみことよのあ
かりにはべりて瓜(うり)をとりてくひ給はむ
とするに刀子なかりし弘計天皇みづから刀

子をとりて授の夫人小野におほせては
たゝめとすつとれ夫人前よりてたちなから
刀子を瓜盤にとりこの日まさにおほみき
をたまへれぬと立なからのみこと
めしつるこのいやましかりにして誅
をうせんとしたまひしかはみつから死ぬ

三年春二月はちのとのみの朔日石上部の
舍人をおかる

四年夏五月的臣蚊嶋穂瓮君ともにつみありて
ひとやにくたされてみなしぬ

五年春二月ひのとのゐの朔かのとのうの日あ
まねくくにゝこほりのちりうせたる佐伯部を
もとめらる佐伯部仲子か後をもて佐伯連
となしたまふ

佐伯部仲子か事は弘計天皇紀にみゆ

六年秋九月つちのとのとりの朔みつのえね
の日ひたかのきちをつかはして高麗に
まかりて巧手者をめさる この秋日鷹吉士

とはいはれしなれは女人ありて難波のかはは
みなんなりて哭て云おとめと訪ありにませ
放毋亦兄　於吾亦兄
まうさあはれなりしや
弱草　吾夫　何怜矣
わか草といふ謂は伴なりて弱草とまて
夫婦のなからひ故弱草とて夫しを
孫あくしたるかゝりんて人とてう
哭
まうし城なしむ菱城のむかしの人康文
康文
く人の名なる倍
父とよんて哭て前みむかひて云ふたそ
なくしのかしらかくうなりてしきや

女人ならくとなん云秋蕊のいやふてこりり
双重　納
秋おり極し康文が伴とくに謡ありするに他
思惟　将雙
いふ前まありしことをかうありそのこと語を
さししとしてなれりて云何とりなりまれ
同伴者
をやらさへて云難波の玉作部乃鯽魚女韓
白水郎曖　曖は麦まを田なり　よとり嫁て哭女とうめり
なくめ住道人山すみとりさて飽田女とうめ
里韓白水郎曖としてそのむしとめ哭女とゝんさき
曽
とてみしとみ死めて住道人山すみさいは玉作部

乃娘なりけんとたりし母麻すとうめり麻す鮑
田女と娶りまゐらせて麻す日鷹の吉士とるか
云く言葉に母他移りてこれなりくその妻鮑
田女らなりし逆志ていたりて誘ちなひして
たまをしきまやをしらひ人として腸ありしむ
玉作部の娘なるとかし海のをえと
たとめとなりける先とうめり住道人
乃山すなくめとなりてあくあるとうめり
山すの妻乃父とし海乃をえとその子

哭女といひしかば死ぬ住道人
乃山すされに妻の母玉作部乃娘なりとお
し母麻すとうめり麻す鮑田女と娶り
或なりに玉作部の娘なりける亦夫とし海の
あとうにあいて哭女とうめりまたし後夫
住道人山すはあひ母麻すとうめるとなか
ら他哭女と麻すと呉又兄弟のよに哭
女かいりとめあるに麻すとよんでおもしたし
兄とよへりなら哭女山すよ引きて鮑田

女とうめ王山すまし鄭魚女ありたしとて
兼すとうめりをなすゝ他あくぬめと兼す
呉母の兄弟なる相人ぬ飽田女夫兼すれ
らんごぬあまよりせといへるなり伊ぬしを
ゝ兄弟長幼と伴ふにに女も男もして兄と
伊い男し女ともしく妹といへるけいよおしよ
とせあまぬとはしいふの
おしゝ日鷹の吉士高麗よりかへりく
工匠須流枳奴流枳などいてまいる今やまと
乃國やまのへのこほり額田邑乃熟皮高麗く
是その末なり
七年春正月をはつせのわかさゝきのみこと
をもつて日つぎのみことゝたてゝ
皇太子とし給
八年冬十月おほんたからいへらくこの時國
中事なくつかさそのつかさにかなひあめの
したうつくしみにおもむき民その業をやすんず
このとし五穀なりはひのおほくみのりて蚕麦よく

なからしうなき海の都近きところにて戸口
海をくらう海をゆ
十一年秋八月かのえいぬの朔みつのとゐの日
天皇正寝にかくれ給ふ　冬十月つちのとのとり
の朔ひのとのうしの日埴生坂本のみさゝぎ
にをさめまつる

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan